

優秀賞

## 将来の夢

湊山中学校 2年 永田 涼

雲一つない空の下。わき上がるスタンドとは反対に緊張が走るベンチ。その思いを胸にバッターボックスに立つ。「勝負だ」真っ直ぐに相手の投手をにらみつけ、手に汗握りバットを構える。小さいころからあこがれだった高校のユニフォームに身を包み、初めて挑む夏の高校野球大会。僕のヒット一本で逆転の九回裏。夢の甲子園まであと一步。

僕の夢、それは甲子園に出ることだ。僕が甲子園に出たいのには理由がある。僕のお父さんは元甲子園球児だ。家にはお父さんが甲子園に出場した当時の写真やメダルが飾ってあり、小さいころから甲子園への憧れを持っている。そのため僕は三歳のころからボールを握り始め、小学校二年生で野球チームに入るまで、毎日のように家族とキャッチボールをしていた。

そして野球チームに入ってから、僕は野球の難しさをたくさん知った。技術やルールはもちろん、仲間と一緒にプレーをしているということだ。ボールを投げるときは相手の取りやすいところに投げる。声をかけ合い、相手を思いやるのが大切だと学んだ。中でも一番大切なのは礼儀だ。あいさつと野球ができることに感謝をする気持ちを大切にできない選手は失格だと厳しく指導された。こうして、本当の「野球」を知ってから僕にとっての甲子園は、あこがれから夢へと変わった。

けれども今の僕には足りないことがある。それは努力を継続することだ。僕は今、人並の努力をしている。けれど甲子園に出ている選手は毎日僕の百倍の努力をしていると思う。僕が高校一年の夏の甲子園にこだわるのは、その年、甲子園は百回記念大会を迎えるからだ。しかしこのままだと百回記念大会に出場する実力がない。だから僕は人よりも百倍の努力をして夢を叶えたい。

雲一つない空の下。仲間の思いを胸に自信を持ってバッターボックスに立つ。「カーン」というバットの音と共に仲間がいっせいにベンチから飛び出してくる。僕はベースを走りながら大きくガッツポーズをする。ついに夢の甲子園だ。